あゆみ通信

VOL. 195
あゆみの会(真宗大谷派大阪教区第2組同朋の会推進員連絡協議会)
会　長　細川　克彦
広　報　本持　喜康

第2組青年僧有志と合同研修会開催しました

第1回例会は、大阪教区慶讃法要への参加にあてることとしましたが、去る6月12日(木)午後2時から稱念寺(岸野龍之住職）をお借りして、あゆみの会第2回例会として、第2組青年僧有志との合同研修会(コラボ）として、開催しました。

進行は、吉田雄彦氏(法山寺）が勤め、真宗宗歌斉唱で開会、細川克彦あゆみの会会長(佛足寺）が挨拶を述べました。

今回の講師は、第2組紹隆寺の喜左上信証先生(副住職）です。

先生ははじめに大学を卒業されて、しばらくして祖父の死に出会われたことを話されました。死は誰一人避けられないこと、また祖父と心の中で向き合っていると、自分の生が問われているように思えると。

先生はレジュメを用意してくださり、「白骨の御文」や仏典童話「キサ―ゴータミーの話」を紹介されました。

また、ある人の投稿「一生を終えて残るのは」の文章を読み上げられ、両親から受けた有形無形の施しを消費するだけでなく、次の世代に伝えていくことが、自分が生を受けた意味なのかも知れないと言うお話を紹介されました。

休憩後は吉田氏の司会で座談会を持ち、僧侶と門徒がお互いに気兼ねなく普段感じたり考えていることを話し合いましょうと、始まりました。

あるご門徒の方は、お寺さんが門徒宅に逮夜参りや法事で出かけられることも大切ですが、お寺に門徒が集まって交流し、また、仏法に出会える機会を作って下さることも大事ではないかと言う意見がありました。

また、あるご住職は、大事だと思っているが、なかなか踏み出せないと話されました。また、漠然とそういうことを要望するより、ご住職一人ひとりにお願いしたらどうかという意見もだされました。

また、法事で共に会食を勧められたらお受けして、交流を深めたいというご住職もおられました。　侃々諤々(かんかんがくがく)、住職方も積極的に発言してくださり、課題がいくらか見えてきた座談会になりました。

最後に恩徳讃を唱和し、閉会となりました。

なお、今回の参加者は住職９名、門徒5名でした。(レポート：細川克彦〈佛足寺〉）

第2組聞法会

教材「初めての正信念仏偈」をご持参ください。
お持ちでない方は、受付でお渡しします。
参加費　500円

7月聞法会
日時　**7月15日(火) 午後2時**
会場　法山寺(阿倍野区天王寺町）
講師　宮部　渡先生(15組西稱寺）

8月聞法会
日時　**8月6日(水) 午後2時**
会場　光照寺(天王寺区上汐）
講師　宮部渡先生（同上）

親鸞のことば

私たちの自分勝手な傲慢さ

煩悩具足の衆生は、もとより真実の心なし、清浄の心なし。濁悪邪見のゆえなり　　尊号真像銘文

「もっと欲しい」「もっとこうなりたい」。常に何かを求めても得られない苛立(いらだ)つ心を落ち着かせて、「今、ここ」で生きていること自体に満足する。自分をよく見せようと知ったかぶりをせず、知らないこと、分からないことは素直にそう言う。相手の良いところを認めて尊敬する。文字で書けば当たり前のように思える理想的なことですが、実際にできている人は、どれだけいるのでしょうか。

「煩悩具足の衆生」とは、まさにそんな私たちのことを表現した親鸞の言葉です。つまり、自分勝手で傲慢な私たち、と言うことです。そして、親鸞は「もとより真実の心なし、清浄の心なし」と、私たちには、そもそも真実で清らかな心などないのだと言います。「ちょっとはよい心をもっている」と思うのが私たちですが、それは思い上がりだと語るのです。

（名古屋別院監修「人生を照らす親鸞の言葉」より）

親鸞聖人との出会い

お朝事に思う④

お内仏の前で、お勤めを終えて考えるひと時。ふと、いつ親鸞聖人に出会ったのかなと。1994年に父、2004年に母を即應寺で送り、2度目の勤めを務めて、義理と厄介のつもりで覗いたお寺。そして、お話を聞いた後、書店に入り仏教書のコーナーに来ていた。そこで、目にしたのが、NHKライブラリーの「親鸞和讃～信心をうたう～」（坂東性純著）でした。親鸞の生涯と「三帖和讃」を詠ませていただき、親鸞聖人について、もっと知りたいと思ったのが、即應寺の聞法会に参加するきっかけになりました。そこから、善隆住職(当時）に背中を押されて第2組推進員養成講座に参加。新田修己師との出会いとなりました。あゆみの会のお仲間と「共に」歩みの始まりでした。（本）

門徒会との合同研修会

日時　**10月2日（木）13：30**
会場　調整中
（決まり次第ご案内します）
講師　**乙部大信先生**
（第３組　　恩楽寺）
参加費　無料
別途、あゆみの会と門徒会からご案内します。

聞法会法話　5月24日

大橋恵真先生の法話聞書

細川　克彦（佛足寺）

昨年は、10月までの6回で、大橋恵真先生、宮部渡先生、廣瀬俊先生による『正信念仏偈』(以下「正信偈」）の前半「依経段」、お釈迦さまが『大無量寿経』で説かれた〝まことのお言葉、南無阿弥陀仏の教え〟が述べられているところが終わり、今回から『依釈段』、すなわち七高僧がお釈迦さまの真言(南無阿弥陀仏の教え）をどういただかれ、どのように救われていかれたかについて説かれているかについて、聞いていくことになります。

最初の龍樹菩薩は、お釈迦さまが亡くなられてから700年ぐらいしてからインドに生まれられたが、その頃は仏教も衰退気味で、ただ、自分一人の救いを求める「小乗仏教」だけがスリランカ等で修行されていた中で、皆と共に救われて行かねばならないと言う大乗の教えを起こされたと。

親鸞聖人は『正信偈』の中で、龍樹菩薩は「悉能摧破有無見」(ことごとく、よく有無の見を摧破せん）と述べられておられると。

龍樹菩薩は「有無の見」すなわち、すべて変わることなく存在すると考えたり、すべて存在しないと考えたりする両極端の考え方を否定されたと。

お釈迦さまは「三法印」と言う教えの一つとして「諸行無常」と言う教えを説かれているにもかかわらず、我々は絶対正しいとか、絶対変わらないとか考えてしまう。

しかし例えば、かって運動中は水を飲んではいけないということが医学的にも正しいとされてきたが、今では適度に飲んでも良いと変わってきた。

また、善し悪しを決めつけたりするが、その背後には自分にとって都合が良いとか悪いとかが隠れている。信じ込み、握りしめる心が我々を苦しめると。

親鸞聖人は『歎異抄』で、「善悪のふたつ総じてもって存知せざるなり」(『聖典』第2版784P）と言われ、「煩悩具足の凡夫、火宅無常の世界は、よろずのこと、みなもって、そらごとたわごと、まことあることなきに、ただ念仏のみぞまことにておわします」(同）とおっしゃっている。

「まこと」とは、損した人も得した人も共に救われていく真理のことであり、私たちも握りしめている手を少しゆるめなさい、そうしたら楽に生きていけると教えてくださいました。

第2組聞法会開催

6月17日(火）午後2時から、天王寺区の専行寺(武石由美住職）で、組内の住職、坊守、門徒、推進員26名が参加して第2組聞法会が開かれました。

墨林浩組長(光照寺住職）が開会。武石郁弥氏(専行寺衆徒）の調声で「正信偈」(草四句目下)・念仏・和讃・回向を唱和しました。続いて、先月から2回目となる大橋恵真先生の法話が始まりました。

先生はレジュメを用意してくださり、今回は『正信偈』の龍樹大師章の後半「宣説大乗無上法」から「応報大悲弘誓恩」のところをお話しくださいました。

一般に仏教各宗において、龍樹大師は八宗の祖と仰がれ、難行苦行をされて、菩薩の階段の41位、歓喜地に至られ、「空」の教えを説かれたと言われているが、親鸞聖人は『正信偈』の中で龍樹大師は、煩悩を無くすことができないと言うことに深く気付かれ、「南無阿弥陀仏」の教えに帰して救われたのであると。その点において我々凡夫が「南無阿弥陀仏」と称えて救われていくのと同質であると教えてくださいました。

休憩後、「涅槃」と言うことについて金子大榮師の「涅槃とは完全燃焼である」と言う言葉を紹介され、それは燃えカスが無いこと、例えば愚痴が無いことであり、何事も他人のせいにすることなく、ただありがとうと言って死んで行けることではないかと話されました。

さらに「大悲」について、例えば人が一緒に泣いてくれることで救われる(同悲）ことがあるように、仏さまのそのような働きを大悲と言うのでしょうと言う、これも金子先生の言葉を引いて話されました。

レジュメでは「大悲」の意味として、仏さまが私の人生の悲しみや呻(うめ)き、疼(うず)きを我がこととして受け止め、一緒に悲しんでくださると言うことであると書かれています。

私の心の、煩悩より深い所にある大悲する心に目覚めてくださいと、結ばれました。私は、それはどういうことかと、よくよく考えてみたいと宿題をいただきました。

(レポート：細川克彦〈佛足寺〉）